

産業建設委員会行政視察報告

1. 視察日程 令和元年10月1日（火）～3日（木）
2. 視察場所 青森県つがる市・むつ市
3. 視察参加者 委員長 二宮健太郎 委員 小春 稔
委員 田中正治 委員 衛藤竜一郎
(随行職員) 議会事務局 河野 真二
4. ①つがる市出席者
つがる市議会議長 平川 豊
つがる市役所経済部地域ブランド対策室長 梶浦宏文
つがる市役所経済部地域ブランド対策室長補佐 原田隆彦
つがる市議会事務局次長 秋田 俊

②むつ市出席者
むつ市議会事務局長 金澤寿々子
むつ市経済部副理事 生産者支援課長事務取扱 酒井一雄
むつ市経済部生産者支援課水産振興グループ総括主幹 畑中正行
むつ市経済部生産者支援課水産振興グループ主事 坂本有幸
むつ市議会事務局総括主幹 青山 諭
5. 視察事項

(1) つがる市（つがるブランドと販売戦略）

【視察内容】

つがる市各地域の代表的な農産物8品目に認定基準をもうけ「つがるブランド」化し、販売戦略の取り組みを研修した。

【概要】

ブランド化の基本方針として、農家所得の向上、後継者の確保、農村地域の活性化、魅力ある地域づくりを方針とし、平成17年4月25日（旧5町村が合併した年）「つがるブランド推進会議」を発足。農家、農協等の関係団体が共通認識をもち、つがるブランドを推進し

ていく。つがるブランド農産物8品目（コメ、リンゴ、メロン、スイカ、ネギ、ナガイモ、トマト、ゴボウ）の選定。農産物認定基準は土地条件、法令、義務等の遵守。栽培基準として農薬削減、有機使用の基準をもうけ市場、販売店、消費者に対して農産物の「安全性」をPR.

ブランド農産物の認定状況

【H27 農産物品目別認定状況】

認定品目	H27 認定者数（人）	H27 認定面積（a）
コメ	209	45,211
リンゴ	161	18,344
メロン	252	9,327
スイカ	92	3,285
トマト	99	1,437
ネギ	141	3,564
ナガイモ	41	4,235
ゴボウ	30	5,160
合計	1,025	90,563

また、つがるブランド加工食品認定基準として認定必須項目を定め、つがる市内の事業者が製造、加工もしくは販売したもので拡販に努めている。

加工食品の認定状況

認定者名	加工食品名
稲垣VICの会	トマトジュースのんでみへんが！
	トマトゼリー たべてみへんが！
つがる地球村株式会社	Tomato ice
	もっちりつるん
	姉妹コロッケ
松橋菓子店	つがるちゃん最中
ラ・ポナム柏	アップルパイ 岩木づつみ
	アップルパイ スティック
	アップルパイ マシェリ
	りんごドーナツ
むらおこし拠点館活	ごぼう・おから入りかりんとう

性化推進協議会	牛蒡茶
	牛蒡めん美人
	つがるごぼう餃子
お菓子の工藤	アップルパイ わらしのほっぺ

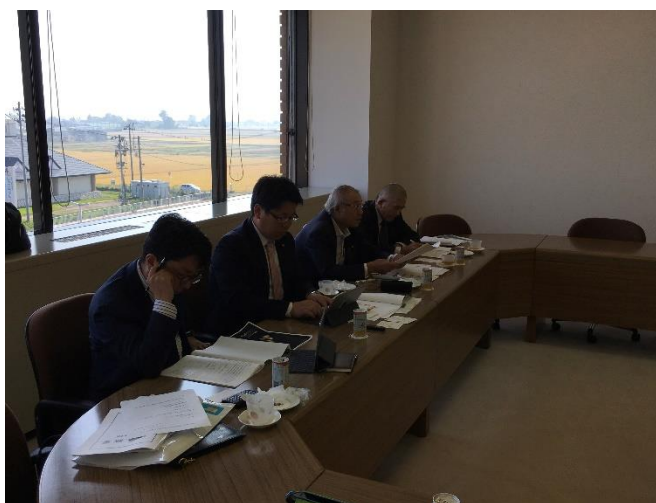
「つがるブランド」化への取組としては、マスコットキャラクター「つがるちゃん」をつがるブランド農産物8品目で組み合わせ、女性や小さな子どもたちに親しまれるかわいらしいキャラクターを誕生させPR活動を行う。また、メロン一坪地主、りんご一枝オーナー募集と体験ツアーの抽選。

県内イベントとして、つがる市メロンの日制定（7月6日）をつがる市メロンの日として子どもたちにメロンの産地であることを印象づけ、農業に興味を持ってもらうことを目的に、市内スーパー等で1日限定統一価格666円で販売、市内学校給食にも提供。

8月11日山の日にはメロン、スイカフェスティバルを行う。例年7,000人の来場者数で賑わっている。また、本年7月7日にメロンに特化した日本初のメロン工房、その名も「果房メロンとロマン」を東京 神楽坂にオープンさせ、つがる市が誇るメロン5品種を中心に四季それぞれのオリジナルメニューを提供しつつ、「つがるブランド」化へのアピールを県内外にむけ、活発的に販路開拓を行っている。

【所感】

つがる市では平成17年の5町村合併当初より一貫して農産物8品目にターゲットをあて、ブランドとして全国に発信しており、本市においてもこだわりを持つ姿勢は参考になる。



(2) むつ市 (むつ市の水産振興について)

【視察内容】

むつ市の水産振興、水産加工品の取り組みを研修した。

【概要】

人口56,924人(8月31日現在)、本州最北端、青森県北東部の下北半島に位置し、万穆約35km、東西約55km、総面積864.16km²、北は津軽海峡を望み、南は陸奥湾、西は平舘海峡を挟んで青森市や各市町村に面している。青森県全体の約9%にあたり、県内で最大の行政区域となっている。地形は恐山山麓の外輪山を形成しており、東部は平野など比較的なだらかな台地が広がり、北部・西部は自然にあふれ、緑豊かな山地や台地が海岸近くまで迫っている。気候については、四季がはっきりしており、夏季は短く湿度が低いことから比較的過ごしやすいが、冬季は降雪期間が長く、積雪も2月中旬には恐山の山間部では1mを超える。平野部や海岸部では70cmの積雪となり、厳しい気象条件となる。

一方、下北半島国定公園が市域に存在することから、各地に風光明媚な景色や温泉なども点在、豊かな自然の恵みを受けた地域となっている。

市町村合併については、1959年(昭和34年)9月1日に大湊田名部市として市制施行、翌年の8月1日に全国初のひらがなの市「むつ市」に改称する。その後2005年(平成17年)3月に、むつ市・川内町・大畑町・脇野沢村の1市2町1村が合併する。人口の約5.2%が第1次産業従事者で、75%強が第3次産業に従事している。気候的に夏場が短く、冬が長いという条件と、夏が場の7~10月にかけて「山背」という寒冷な風が吹くことが原因で、第1次産業従事者が少ないとのこと。また、市庁舎については元スーパー「ダイエー」の店舗(平屋建て)を9億円余りで買い取り、22~23億円をかけ改修し現在に至っている(バリアフリー)。人口については少子高齢化が進んでいる(女性が半数強)。

水産振興について

むつ市は三方を海に面しており、北は津軽海峡、西は平舘海峡、南に陸奥湾と好漁場を抱えている。市内にはむつ市、関根浜、河内町、大畑町、脇野沢村の5つの漁協があり、それぞれが漁を行っている。

津軽海峡では・・・イカ・サーモン・アンコウ・マグロ・タラ等の漁

平館海峡では・・・タラ・海峡サーモン

陸奥湾では・・・ホタテ・ナマコ漁が盛んである。

ホタテ漁だけで30億～50億円の取扱高がある（年によって多少差がある）。ホタテ・ナマコの加工品に力を入れているが、道路事情（現在整備中）が悪いため、県と協力し海外に向け販売促進をしている（特にシンガポール・中国・タイ・香港・台湾）。

また、メディアを取り込み、青森県内地元紙が下北半島の宣伝を東京や地方大都市で実施している。さらに有名シェフによる料理のいつ円なども取り組み、ふるさと納税の返礼品などにも多く利用している（納税額は1億6千万円ほど）。

・ホタテ

「陸奥湾のホタテ」として取り扱っているが、養殖が主である。全国トップの生産量を誇っており、刺身や地元料理でもあるみそ焼きで食するのも絶品で、干し貝柱・調味料を加えた缶詰・焼きホタテも好評。また、漁協婦人部が主になって加工品やドレッシングなどの独自の食品も手掛けている。

・ナマコ

陸奥湾は水深が30～50mで、岩場等も多く、河内町漁協は全国屈指の漁獲量を誇っていて、干しナマコの加工品を積極的に推進している。その製品は海外にも輸出され、「川内産干しナマコ」として、ブランド化に取り組んでいる。ただ価格が高いため密漁者が多く、数億円の被害が出ている。防犯カメラ等設置し対処している。

・イカ

津軽海峡は、国内有数の「イカ」の好漁場であり、大畑漁協はイカ釣り漁業が盛んでそれに連動する加工業も主力産業で「イカの街」として栄えてきた。活イカの刺身はもちろんのこと、イカ寿司・いか飯なども人気である。ここ数年海水温の上昇などが原因で不漁が続いているとのこと。

・海峡サーモン

津軽海峡の外海で育ったドナルドソンニジマスのブランドで、2年間淡水で養殖し、津軽海峡の外海で約8ヶ月育ったもの（漁獲後直に活べし、氷水の中で脱血処理をする）。春から夏の限定で、生の海峡サーモン

ンが販売されている。毎年6月に開催するサーモン祭りでは、来場者が1万人を超える活況ぶりとのこと。またふるさと納税の返礼品として加工品の刺身などが大人気とのこと。今期は平成元年の養殖開始以来漁獲量が初めて100tを突破する。

・タラ

毎年12～2月にかけて魚群となって産卵のために陸奥湾に入ってくる。タラは白子や肝が絶品で、脇野沢漁協のブランドとなっている。

【所感】

むつ市の漁協に関しては、三方を海に囲まれ、各種の海の幸が豊富で環境的にも恵まれている。今後も加工品などの推進により販売高も上昇するのではと思われる。また、ふるさと納税の返礼品にも多くの品が利用されているとのことで、今後も納税額が増えると思われる。しかし農業については、四季を通して厳しい環境にあり、特に夏場（7～10月）に「山背」の風が吹き、作物が限られてくるので第1次産業従事者が5.2%弱とのことと理解するところである。

今回の研修視察では、漁獲した加工品の推進を、漁協婦人部が研究開発し、第6次産業化を進めブランド化していることを視察した。本市も別府湾・豊後水道・伊予灘など漁場はあるが、水温の上昇で漁獲量が激減している。今後は第6次産業化を目指し、高収益を上げることを望み、また漁協の青年部・婦人部との話し合い、議論ができる場を設けていきたい。

